

札幌におけるラーメンのルーツが、一九二二年(大正十年)、北大正門前で開業した竹家食堂にあったことは、よく知られている。本書は、竹家食堂創業者夫婦の四男である大久昌巳さんと、ラーメンの歴史に関心をもち製麺会社「菊水」(本社・江別)の常務・杉野邦彦さんの二人が、札幌でラーメンがどのように



「竹家食堂」ものがたり

大久 昌巳・杉野 邦彦著

生まれたのか、共著のかたちで、その誕生秘話をまとめたものである。

これまでも富岡木之介著「さっぽろラーメン物語」(まんとん社、一九七七年)など、竹家食堂のことはさまざまなかたちで紹介されてきた。しかし、今回は直系の子孫が執筆にあたっている。一部では知られていたのかもしれないが、筆者などは初めて知った興味深い事実が、本書にはいくつも登場する。

例えば、旭川ラーメンの歴史に、竹家食堂が深くかかわっていたこともそのひとつ。また、神戸に「竹家ラーメン」があることは、ラーメン通の間ではかなり知られていた

が、札幌ではなく、なぜ神戸なのか。その理由も本書では詳しく明らかにされる。札幌ラーメンの歴史に関してはおもとより、日本のラーメンのあゆみをたどる上でも、本書は貴重な側面をもっている。

ただ、残念なこともある。大久昌巳さんが執筆している、本論というべき文章が、小説「竹家食堂物語」なのである。手元の資料や自身の記憶だけでなく、丹念な調査を行って執筆したが、内容からも想像できるだけに、事実をもとに、ノンフィクションとしてまとめてほしかったと思われるのだ。

(中館寛隆)北海道読書新聞
社編集長

(TOKIMEKI)パブリッシング
発行、角川書店・発売 一六〇〇円